



ったこと、また、それによって海をひっくり返すような膨大な水の急激な移動が起こったことを認めています。それまで温暖であったシベリアー帯は、地軸の変化で新しい北極に接近し、地を覆った水が一瞬のうちに氷結、キンポウゲなどの草を食んでいた数え切れないほど多くのマンモスを氷漬けにしてしまったのでした。マンモスのような巨大な動物を体内の細胞に結晶を形成させないで瞬時に凍結するには、少なくとも氷点下華氏百五十度という条件下に置かれる必要があるとのことで、地質学上の『激変説』でしか説明できない天変地異が地上に起こったことは否定できないのです。この地軸の変化は赤道の位置にも変化をもたらし、今日のアンデス山脈上はかつての赤道で、塩水をたたえたアンデス山上のチチカカ湖近辺は熱帯性気候の港町だったのでした。したがって、科学が証明しているように、ノアの時代の水かさの大きな要因が水の移動によるものであったとするなら、海水が真水によって急激に薄められたと考える必要もないし、水中の生き物は水かさが増えても海面近くに浮上し泳ぐことはできるわけで、水圧で押しつぶされるということはありません。

4、5に関しては、大陸が今日の五大陸に分かれたのが、聖書が語っているようにノアの洪水以降、ペレグの時代の出来事であったとしたら、まだ陸続きだった一つの大陸の中を動物は自由に移動できたということになるのです。しかも、洪水前は、地球を取り巻いていた厚い雲、水蒸気の層によって地球は世界中どこでも温暖気候であったと考えられるので、動物は片寄りなく棲息していたということになります。動物には津波、地震など異常事態が起こることを前もって感知する予知能力があるようで、高台に向かって移動する習性があるので、ノアの洪水のときにも、ノアが箱舟を造った高台に自然に集まってきたことは十分考えられることです。実際、興味深いことに、2004年12月のスマトラ沖地震では、タイ南部の海岸にいた観光用の象が津波が襲来する直前に外国人観光客を背に乗せたまま近くの丘に向けて疾走し、また鎖に繋がれていた象も鎖を引きちぎって逃げたことが報告されたのでした。また野性動物が保護されていたヤラ国立公園でも、動物は危険を察知して事前に逃げていたようで、動物の死骸は全く発見されなかったとのことです。

世界中の洪水神話の民間伝承は五百以上に上るそうですが、人間の悪が壊滅的大洪水という前代未聞の大惨事を引き起こしたこと、神に選ばれた民が存在すること、船によって生存したこと、動物も救われたこと、救われた者たちが山の頂上に置かれたことを伝えている点でその多くが共通しているほか、鳥が外に放たれたこと、八人が救われたことなども語り継がれているのです。中国の漢字には創世記の十一章までの出来事が反映されていることが解明されていますが、たとえば、洪水に関わる漢字の構成部位の意味を分析すると聖書の記述を裏づけていることは明らかで、このことから世界中の洪水の民間伝承が各地で局所的に起こった洪水に言及しているのではなく、世界的な一つの出来事への言及であることを裏づけているのです。人間史上最初の大きな舟、「船」が八人の「口」（人を象徴）によって特徴づけられるものであること、「水」「氺」は古代、水平な流れではなく垂直な流れとして「𠂔」のように書かれたようですが、ノアの洪水のとき初めて降った雨が天からの水であったこと、地から泉のように水が噴出したことがこれらの漢字の部位には表わされており、「**巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開かれた**」という驚くべき恐ろしい体験がそのまま漢字に反映されたことが分かります。「一緒に」を表わす「共」には、地上（「一」）で八人の者が手を取り合って（「卅」）一つになったという概念が反映されていますが、この漢字に偏「氺」をつけると、「洪水とか広大な」の意を表す漢字「洪」が出来上がります。確かに八人の人々を巻き込んだノアの洪水は漢字創作の基になったように、世界的な大惨事だったのでした。「伝える、流れに続く、方針に従う」の意の「沿」は、漢字の古い形式では水の上に浮いている八人の人として描かれており、出来事が大洪水を経て旧世界から新世界へと語り継がれたことを表しているのです。また、一年と十七日間の箱舟生活を経て、ノアが新世界に降り立って最初にしたことは、祭壇を築き、神にいけにえをささげ、感謝することでした。神が儀礼的にきよい動物ときよい鳥だけは七つがいつつ箱舟に入れるようにと命じられたことは、洪水後のまだ何も生み出されない時期にいけにえをささげるための備えでした。いけにえをささげる（日本語ではこの意味は薄れているようですが）の意の「祭」には、動物（「月」は肉の意）が洪水後、再び（「又」）、神（「示」）にささげられた出来事が反映されているのです。また、「神」を構成している漢字の偏の部分の「礻」（あるいは、「示」）は、「宣言する、顕わす、示す」の意で、神がことばを発せられることによって天地を創造されたことを反映しています。この漢字のつくりの部分も、「申」で、「**初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった**」とヨハネの福音書に記されているように、神は、ことばを宣言される方であり、ことばその方であることが描写されているのです。

1845年に古代アッシリヤの首都ニネベで発掘された洪水物語のアッシリヤ版の書板の破片が修復されて1872年、「ギルガメシュ叙事詩」が世に出たとき、聖書の洪水物語は、イスラエルの民がバビロン捕囚に置かれていたとき、バビロンに伝えられ、そこから世界中に広められたとみなされたのですが、その後の研究で、洪水伝承が大筋では内容が一致しているが細部では異なっていることから、今日では、聖書が主張しているように、新世界の基がノアの三人の息子たち、三人三様に語られた情報源にあるとする見解に落ち着いているようです。邪悪な者、汚れた大地が一扫された新天地にサタンはどのように挑むのでしょうか。来月号で考察しましょう。